

## 使徒の働き5章12-42節 「エルサレム中に広まる教え」

### 1A 使徒たちのしるしと不思議 12-16

### 2A 御名ゆえの辱め 17-42

#### 1B 天の使いによる助け 17-26

#### 2B 神に従う使徒たち 27-32

#### 3B ガマリエルの意見 33-42

## 本文

使徒の働き 5 章を開いてください、私たちは午前中に 5 章 1 節から 11 節までを見ました。その続きを見てきます。

### 1A 使徒たちのしるしと不思議 12-16

<sup>12</sup> さて、使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行われた。皆は心を一つにしてソロモンの回廊にいた。

聖霊が弟子たちに臨まれて以来、使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が起きました。2 章 43 節、三千人がバプテスマを受けた後にそう書いてあります。そして、宮で指導者たちがペテロとヨハネを捕らえた後に、釈放された後に彼らが報告したら、彼らは、主のことばを大胆に語らせてください、また、「4:30 御手を伸ばし、あなたの聖なるイエスの名によって、癒しとしるしと不思議を行わせてください。」と祈っています。

それで、主が、多くのしるしと不思議を、彼らを通して行われていますが、けれども午前礼拝で、アナニアとサツピラの事件が起きました。偽って、持ってきた代金はこれが全てだと言いました。彼らはその場で息絶えてしまいましたが、そのような厳しい形で主は、教会を聖く保たれたのです。それで、多くのしるしと不思議が起きました。主の力ある業と、聖さは深く関わっています。教会が聖く保たれていることによってこそその、大きな御業であります。教会の何が問題かと言えば、その方法ではないのです。心の思いや行いにおける汚れがあれば、そこで主の力ある働きが起り得ようがないのです。信仰を持っていない方々のほうが敏感かもしれません。自分は正しいと思いつつながら、赦さない心や怒りが心があれば、どうして自分が導こうとしている人が、その教会に魅力を感じるでしょうか？

アナニアとサツピラが取り除かれたことによって、「皆は心を一つにして」とあります。偽善や欺きのあるところで一致は望めません。けれども、悪が取り除かれたことによって、聖霊が彼らに一つの心を与えておられます。「ソロモンの回廊」ですが、足なえの男が立ち上がった後に、ペテロが

人々に説教したのも、ソロモンの回廊でした。そこが、定期的な集まる場所になっていたようです。

<sup>13</sup>ほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間に加わろうとはしなかったが、民は彼らを尊敬していた。

<sup>14</sup>そして、主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった。

主の力ある働きを見て、そこに対する一種の畏敬のようなものが、信じていない人々にもあったようです。軽々しい気持ちで仲間に加わっていけないと思ったのでしょう。加わろうとはしませんでした。尊敬していたのです。それだけではなく、実際に主に献げる決断をした人々も大勢出て来ています。

あまりにも多くの人々が反対のことを考えます。「これは、未信者の人たちにはつまずきになるから、神の厳しい取り扱いについては語らないでおこう。」というものです。いいえ、一般の人々はしっかりと見えています。本気で信じる対象は、本気でその信者を取り扱うということは普通でも分かります。わざわざ興味のない人、神を恐れていない人たちを、神を恐れないままで信じさせようとする自体が、無意味です。

<sup>15</sup>そしてついには、病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせて、ペテロが通りかかるときには、せめてその影だけでも、病人のだれかにかかるようにするほどになった。<sup>16</sup> また、エルサレム付近の町々から大勢の人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人々を連れて集まって来た。その人々はみな癒やされた。

ペテロによって主が行われていることは、まさに主ご自身が行われていることに似ていますね。主のところに来て、その衣の裾にさえ触れたら癒されると思って、それを行った長血を患う女が、その場で癒されました。ここでは、影にだけでも、病人のだれかにかかるようにするほど、寝台や寝床を並べていたのです。

ここで大事なことは、ペテロそのものにその力が隠されているのではないということです。彼は足なえを起き上がらせた後に、「3:12 私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。」と言いましたが、彼の力ではないのです。長血をわずらう女のことを思い出してみましょう、イエス様は、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われました(マルコ 5:34)。イエス様の衣の裾に、その力が宿っていたわけではありません。「5:28 あの方の衣にでも触れれば、私は救われる。」と彼女が信じて、行動に移したのです。つまり、主によって与えられた信仰を、意欲的に、積極的に働かせたのです。漠然と、主は癒されると信じるのではなく、今、ここに与えられている状況の中で、癒しの主が介入してくださるという信仰であります。

主は、「ルカ 6:20 貧しい人は幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。」と言われまし

た。なぜ貧しい人が幸いかと言いますと、その分、信仰を働かせるよ余地が多くなるからです。神により頼むことがしやすいです。ここにいる人々が、今の私たちに与えられている医療技術や医療制度が、ほとんど全くないことにお気づきください。今であれば簡単な治療薬で癒せるものを、当時は全くないということがほとんどですから、彼らにとっての病は私たちよりもはるかに身近な存在です。その分、癒しというのは神からくるものだということを良く知っていました。医者に頼らずに、神に頼ることを知っていたのです。

そして、「エルサレム付近の町々から」人々が集まってきていることに注目してください。このことにより、使徒の働き 1 章 8 節にあった、イエス様の弟子たちに対する約束が実現したことが分かります。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むときに、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」ユダヤ地方とありますね。エルサレムとその付近やユダヤ地方です。エルサレムだけでなく、ユダヤ地方にも広まっていきました。

## **2A 御名ゆえの辱め 17-42**

### **1B 天の使いによる助け 17-26**

<sup>17</sup> そこで、大祭司とその仲間たち、すなわちサドカイ派の者たちはみな、ねたみに燃えて立ち上がり、<sup>18</sup> 使徒たちに手をかけて捕らえ、彼らを公の留置場に入れた。

先に、ペテロとヨハネが足なえを癒した後で説教をしていた時は、4 章 2 節によりますと、「イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることに苛立ち」とあります。しかしここでは、「ねたみに燃えて立ち上がり」とあります。もう主が生き返ったことを、反証する根拠もすべて失ってしまっています。妬みに燃え上がりました。イエス様が捕らえられたのも、妬みによることを思い出してください。「マタ 27:18 ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたのである。」妬みは、人を殺すほどのものなのだということを知るのは大切でしょう。人は、自分は殺人などという大罪を犯したことはないとして自分を義としてしまうのですが、妬むことであれば、自分がどれだけ罪を神に対して犯しているか、知ることができます。

妬みは、まるで程度が違う人には抱くことのない感情です。僅かに自分よりもまさっていると感じるから、それで妬みます。サドカイ派の人たちにとっては、神殿という自分の領域において、自分よりも人々に影響を与えていることを分かったので妬んだのです。福音書においては、弟子たちでさえ妬んだことがありました。「マル 9:38 ヨハネがイエスに言った。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。」自分たちがイエス様によって遣わされて、その御名によって悪霊を追い出していましたが、今、イエス様のそばにいないのに、御名を使って追い出しているのです。それで妬んだのです。「9:39-40 しかし、イエスは言われた。「やめさせてはいけません。わたしの名を唱えて力あるわざ

を行い、そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。わたしたちに反対しない人は、わたしたちの味方です。」ですから、私たちは、イエス様のように心の広く持っている必要があります。同じような働きがあったら、主のゆえに共に喜びましょう。「Ⅰコリ 12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」

ところで、使徒たちが「公の留置場」に入れられています。ペテロとヨハネが神殿の敷地にある留置する所に入れられたようですが、ユダヤ人にとって公の留置場があったようです。ローマにも、留置場はありますが、それとは別にユダヤ人たちによる留置場がありました。

<sup>19</sup>ところが、夜、主の使いが牢の戸を開け、彼らを連れ出し、<sup>20</sup>「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい」と言った。

主の使いの助けによる脱獄です。他に、ペテロがヘロデ・アグリッパ一世によって捕えられていた時に、12章ですが御使いの助けによって牢屋を出ていくことができました。かつて、「天国の人」という、中国の家の教会の指導者による本が出版されましたが、そこには実際に、主の介入による脱獄の証しが出てきます。<sup>1</sup>

ここで主の使いが、「このいのちのことばをすべて語りなさい」と語っていることがとても興味深いです。彼らの脱獄が、イエスの復活の事実を指し示しています。ペテロが、五旬節の時にこう説教しました。「2:24 しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。」死んでいることを、つながれているとペテロは言い表しています。彼らが脱獄したことは、つながれていることはあり得ないとする復活の事実を指し示しているのです。パウロは、物理的に牢屋から解放されなかったものの、テモテに対して、「Ⅱテモ 2:9 この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばはつながれていません。」と言いました。

そして、主のことばは、「いのちのことば」です。キリスト教会は、信条をととても大切にしますし、それはとても大切だと私も思います。最も古いものは「使徒信条」ですが、ニケア信条など、教会史の中で信条の継承がなされてきました。けれども、そこでいつの間にか信条さえ受け入れていれば、その人は新しく生まれているかのようにみなす誤解が生まれてしまいました。信条において同意していても、その人がイエス様の復活の命によって生きていなければ、また御霊の命において生きていなければ、「いのちのことば」ということはでいけません。主のことばによって、生かされているかどうかにかかってくるのです。

---

<sup>1</sup> <https://www.charismanews.com/world/73158-tortured-evangelist-supernaturally-escapes-high-security-prison-by-simply-walking-out>

<sup>21</sup> 彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間たちは集まって、最高法院、すなわちイスラエルの子らの全長老会を召集し、使徒たちを引き出して来させるために、人を牢獄に遣わした。<sup>22</sup> ところが、下役たちが行ってみると、牢の中に彼らはいなかった。それで引き返して、こう報告した。<sup>23</sup>「牢獄は完全に鍵がかかっている、番人たちが戸口に立っていました。しかし、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」<sup>24</sup> 宮の守衛長や祭司長たちは、このことばを聞くと、いったいどうなることかと、使徒たちのことで当惑した。

ペテロとヨハネに行ったのと同じように、最高法院を召集しました。ところが、鍵がかかっているのに中にいないという、とんでもないことが起こりました。彼らが当惑しています。これが、主のなされていることでしょう。彼らは使徒たちを辱めようとしましたが、彼ら自身を神のいのちある働きによって辱めておられるのです。悪を行う者は、その悪によって報いを受けます。

<sup>25</sup> そこへ、ある人がやって来て、「ご覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、宮の中に立って人々を教えています」と告げた。<sup>26</sup> そこで、宮の守衛長は下役たちと一緒に出て行き、使徒たちを連れて来たが、手荒なことはしなかった。人々に石で打たれるのを恐れたのである。

御使いによって救われたのは奇跡ですが、もっとすごいのは、主の使いに励まされたように、彼らが宮に戻ってみことばを宣べ伝えていることです。彼ら自身が、それを願って祈っていましたが、再び捕らえられてしまうことは目に見えています。しかし、彼らは損得で物事を考えるのではなく、主のみこころを果たすのに集中していたのです。後にパウロが、リステラという町で人々が煽られて、パウロをなんと石打にしてしまいました。死んだようなので、彼を町の外に引きずり出したら、なんと彼は起き上がりました。しかし、もっと驚くことは彼がその町に戻っていることです。「14:20 しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。」また、石打にあってしまうのかもしれないのに、そこにわざわざ戻って、福音を語ったのです。みなさんは、「反対にあって、少し後ずさりしても、それで果たすべき御心を知っていますか？」という問いかけにどうこたえるか考える必要があると思います。

そして、使徒たちは、かつてのイエス様と同じように守られています。イエス様も、イスカリオテのユダ、また神の定めの時がくるまで、彼らが捕らえたいと思っても、人々の反応が気になり、捕らえることはできませんでした。ここでは捕えても、手荒なことはできなかつたとあります。

## 2B 神に従う使徒たち 27-32

<sup>27</sup> 彼らが使徒たちを連れて来て最高法院の中に立たせると、大祭司は使徒たちを尋問した。<sup>28</sup>「あの名によって教えるはならないと厳しく命じておいたではないか。それなのに、何ということだ。おまえたちはエルサレム中に自分たちの教えを広めてしまった。そして、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしている。」

イエスの名ということを意図的に避けて、「あの名」と言っています。自分たちはそこに関与しないという強い態度です。反対する人は、こういった微妙なことにまで避けようとするね。

そして、次の彼らの非難が喜ばしことです。「おまえたちはエルサレム中に自分たちの教えを広めてしまった。」イエス様が、聖霊が臨まれると力を受けて、初めにエルサレムにおいて、ご自身の証人になると言われていました。それが、反対者の言葉から確認できるということです。紛れもない、教会の証しの力が現れたということでもあります。自分たちの周囲に、それだけの影響力を与えているでしょうか？

そして、彼らはペテロが自分たちに向かって、イエス様が十字架刑に処せられたことを彼らの責任としていることに気づいていました。事実、福音書の記述では明確にそうなのです。彼ら自身が叫んだのです。ピラトが、「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」と言ったら、「その人の血は私たちや私たちの子どもの上に。」と言いました(マタ 27:24-25)。

<sup>29</sup>しかし、ペテロと使徒たちは答えた。「人に従うより、神に従うべきです。<sup>30</sup>私たちの父祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスを、よみがえらせました。<sup>31</sup>神は、イスラエルを悔い改めさせ、罪の赦しを与えるために、このイエスを導き手、また救い主として、ご自分の右に上げられました。<sup>32</sup>私たちはこれらのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊も証人です。」

ペテロと使徒たちは、あまりにも的確に、また端的に宣言しています。第一に、「人に従うより、神に従うべきです。」ということです。前回、ペテロとヨハネが捕らえられた時にも、神に聞き従うことが、人に聞き従うことよりも、神の御前に正しいことなのだと話しました(4:19)。

第二に、彼らは「あなたがたが木にかけて殺した」と言って、すぐに彼らの責任逃れを元に戻しています。ここで、十字架という言葉ではなく「木」という言葉を使っていますが、ローマの十字架であったものの、ユダヤ人の中で律法の中で、「申命 21:23 木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。」とあるからです。聖なる方、正しい方を神に呪われたものとしたという責任を明らかにしています。そして第三に、そのイエスをよみがえらせたと言っています。これまた、サンヘドリンにいる多くのサドカイ派の人たちを怒らせました。第四に、イスラエルが悔い改め、それによって罪の赦しを得るということです。これは、イスラエルのみならず、全世界の人々に神が求められていることが、明らかになっていきます。第五に、イエス様が救い主となり、今は神の右の座に着いておられることです。これは、あらゆる主権、力が主のものとなり、また、すべての名にまさる名が与えられたことを意味しています。

そして最後、第七に、彼らがこれらのことの証人で、聖霊も証人であると言っています。彼らは興味深いことに、自分たちと聖霊の証しを分けています。自分たちについて言うならば、十字架刑に仕向けたのはユダヤ人指導者であることはよく知っていますし、復活したイエスご自身を目撃し、天に上げられたことも見えています。けれども、聖霊による証言というのはどういうことでしょうか？それは一つに、しるしや不思議を見ているということです。終わりの日に御霊が全ての人に注がれて、老人や夢を見て、若者は幻を見るというようなしるしが伴います。それらをもって、聖霊が証人であり、何も彼らだけの証言に頼っているのではありません。それから、聖霊によってこそ、内的な証明が行われます。心の中で、イエスが来るべき救い主なのだということを知るのは、御霊によることなくしてできません。「Iヨハ 4:13-15 神が私たちに御霊を与えてくださったことによって、私たちが神のうちにとどまり、神も私たちのうちにとどまっておられることが分かります。私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、その証しをしています。だれでも、イエスが神の御子であると告白するなら、神はその人のうちにとどまり、その人も神のうちにとどまっています。」ユダヤ人は、律法にあるように、二人、三人の証人がいて、初めて事実と確認します。ですから、使徒たちによる証言が一つ、聖霊による証言が二つで、これで事実を確認されます。

### 3B ガマリエルの意見 33-42

<sup>33</sup> これを聞いて、彼らは怒り狂い、使徒たちを殺そうと考えた。

ここの「怒り狂い」という言葉は、「のこぎりで引き切られる」というのが直訳です。同じ言葉を語っているのですが、2章37節ではユダヤ人たちは「心が刺された」とあり、彼らは悔い改めました。みことばは、人の心を確かに指しますが、それはへりくだって、悔い改める心には癒しとなります。ところが、心を強情にしている者にとっては、そのことばは無理やり引き切られる、裁きの言葉となります。それで、強く反対しているのです。7章で同じ言葉が使われて、ステパノの説教に対して石投げをサンヘドリンの者たちが行い、それでステパノは死にました。

<sup>34</sup> ところが、民全体に尊敬されている律法の教師で、ガマリエルというパリサイ人が議場に立ち、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、<sup>35</sup> それから議員たちに向かってこう言った。「イスラエルの皆さん、この者たちをどう扱うか、よく気をつけてください。

ここで、サンヘドリンの判断を変える人物が現れます。ガマリエルという人物です。「パリサイ人」とあるように、サドカイ人たちが怒り狂っている中で、パリサイ派の見方を反映させるような意見を述べます。イエスの復活の命を表すような数々の出来事に対して、その不思議やしるしをそのまま、神からのものかもしれないと判断したのです。

彼の名前の意味は、「神は私の味方である」というものです。彼は、聖書以外の文献にも出てくる人物で、パリサイ派の中では、最も有名で尊敬されている律法学者です。そして、使徒の働き

22 章 3 節で、パウロは自分がガマリエルの下で学んだ、彼の学徒であることを明かしています。その彼も、回心した後は、パリサイ派であるから、死者が復活するというのは当然のことであると、イエスがよみがえられたことを論証していきます。

<sup>36</sup> 先ごろテウダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほどになりました。しかし彼は殺され、従った者たちはみな散らされて、跡形もなくなりました。<sup>37</sup> 彼の後、住民登録の時に、ガリラヤ人のユダが立ち上がり、民をそそのかして反乱を起こしましたが、彼も滅び、彼に従った者たちもみな散らされてしまいました。

イエス様は、ユダヤ人の王として、ローマに逆らっているとして告発されました。それは全くの嘘ですが、バラバという人はまさにそのような罪、反逆や扇動、また殺人の罪を犯していました。その時代、そうした人々をメシアか誰かのように信じさせて、ローマに歯向かわせる者たちは、実際にいたのです。そして祭司たちや宮の守衛長らは、そうした者たちを取り除かなければ、ローマに我々が潰されてしまうという恐れを持っていたのです。

ここに出てくる事件、テウダがいますが、他に文献がありません。けれども、もう一人、ガリラヤ人のユダについては、紀元 6 年に納税に反対する運動を展開させた人物としての記録があります。福音書でも、納税することは律法にかなうことかどうかをイエス様に聞きましたね。ユダヤ人はローマを憎み、その象徴的存在である納税を憎んでいました。そして、この反発は、紀元 66 年から始まるユダヤ戦争へと発展します。けれども、このユダもテウダと同じく、滅び、人々は散らされました。

<sup>38</sup> そこで今、私はあなたがたに申し上げたい。この者たちから手を引き、放っておきなさい。もしその計画や行動が人間から出たものなら、自滅するでしょう。<sup>39a</sup> しかし、もしそれが神から出たものなら、彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかすると、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」

ガマリエルは、この道の信者になろうとはしていませんが、理にかなった判断をしています。人からのものであれば、神が自滅させるようにします。神からのものであれば、滅ぼすことができません。現に今、牢屋に入れていたのに、戸が閉まったままで、宮で彼らが教えていたのですから。神からのものであれば、神に敵対するものとなってしまいます。

おそらく、この意見をパウロは、同じサンヘドリンの議員として聞いていたのではないか？と思います。師匠であるガマリエルの助言にも関わらず、彼は激しい迫害者となっていきますが、後に、「26:14 とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。」と主イエスご自身から言われます。つまり、自分の良心には、これは神からのものなのだという承認の印がおされたようなものでした。その良



心に対して反対のことをして、自分を痛めているということです。

<sup>39b</sup> 議員たちは彼の意見に従い、<sup>40</sup> 使徒たちを呼び入れて、むちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと命じたうえで、釈放した。

議員たちは、ガマリエルの意見には従いましたが、しかし納得していたわけではありません。むちで打って、イエスの御名によって語ってはならないと命じて、釈放しています。このむち打ちは、ローマのものではなく、ユダヤ人たちのものです。申命記 25 章 3 節に、「四十までは彼をむち打つてよいが、それ以上はいけない。」とあります。誤って 41 回以上になるのを防ぐためでしょう、一回少ない 39 回までとされていました。ローマのような、ガラスや骨の破片などが入ったものではなく、牛の皮の碑も本でできていました。それでも、過酷な仕打ちであることには変わりません。

<sup>41</sup> 使徒たちは、御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った。<sup>42</sup> そして毎日、宮や家々でイエスがキリストであると教え、宣べ伝えることをやめなかった。

すばらしいです、使徒たちはむしろ喜んでいます。自分たちの愛する主の栄誉のために、辱められるほどになったのですから。それだけ、御心を行えていることであることが分かり、光栄なことだったのです。主が山上の垂訓で、お語りになっていたことですね。「マタ 5:11-12 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。」

そして、御名によって語ってはならないと厳しく命じられたのも関わらず、全くその勢いをとめることはありませんでした。彼らには、人の命令よりも、神に従うことが正しいと思っていたからです。これはそのとおりです。上の権威は神から来たものですから従いますが、神に命じられたことをやめなさいと言われたら、神の命令に従います。いろいろな反対があっても、あきらめず、がっかりせず、主から命じられたことを忠実にやっていくのみです。

彼らは、「毎日」教えたり、宣べ伝えたりしました。今のキリスト教会は、週に一度、あるいは熱心な人でも数回に留まっていますが、彼らは毎日行っていました。教会というのが、毎日の存在になっていたのです。

次に、「宮や家々で」行っています。おそらくは宮で教えているのには、信者のためもあるでしょうが、伝道のためだったでしょう。まだイエスを自分のメシアとして信じ、受け入れてない人々に聞いてほしいということがあったことでしょう。また、集まる場所はないですから、ある程度の人々が集まる格好の場所であったのでしょう。その他のことについては、家々で行っていました。後に、会

堂自体でも教会として集まっていた形跡も聖書には見えますし(例:ヤコブ 2:2、黙示録 3 章のフィラデルフィアの教会など)、古い文献には、シナゴークに集まっていたことが書かれています。後に追い出されていくようになりますが、大事なのは場所ではありません。「家の教会運動」というものが、世界でもまた日本でも流行っていますが、家のほうがよいとする聖書的根拠はないのです。それほど集まれる場所が限られていたからに他なりません。

そして、「イエスがキリストであると教え、宣べ伝えることをやめなかった」とあります。教えるのは、信仰者に知識が与えられるために行うこと。宣べ伝えるのは、宣言することです。未信者に主に行っています。しかし、信者であっても宣言は聞いていくべきですし、未信者でも、教えの中でイエス・キリストの宣教を聞いていくことができます。大きく分ける必要はないでしょう、ここにあるように初代教会もそうでした。

こうして第一段階を迎えた気配がします。エルサレムに主の教えがいっぱいになり、ユダヤ地域に広がっています。ここから、大きなことが起こらなければ、彼らがそれ以上、外に動くことはなかったでしょう。けれども、まず教会に新たな問題が起こるのを許されます。その解決法のために立たされていくのが、ギリシア文化や言語を背景に持つユダヤ人たちの存在です。異邦人との架け橋になっていくような人々です。